

中ザワです、どうもこんにちは。  
僕のほうで用意したものは三段階ありまして  
三段階あるんですけれども、三段階あるのは  
まず最初、10分間、youtubeに上げてある動画で  
もう皆さん見られている方もいらっしゃると思いますが  
見られてない方もいらっしゃると思いますので  
それから見られている方は復習の意味も兼ねて  
僕は芸術特許というプロジェクトを長年行っておりまして  
芸術特許に関する動画10分間ちょっと最初に見ていただきます。  
その後先程、古屋さんが紹介してくれたのは方法主義という活動  
あるいは新・方法主義という活動を僕はやっているんですけれども  
その中でも旧・方法、新・方法ではなくて旧のほうの方法主義  
旧・方法主義の宣言をパフォーマンスらしく朗読したいと思います。  
さらにその後でパワポを使ったレクチャーを致します。  
「芸術の方法と方法の芸術」という論文を2008年に書いたんですけど  
それについてのレクチャーを行いたいと思います。  
だいたい30分くらいでいけるかなというふうに思っています。  
では最初に、まずボタンを押すんですけどyoutubeの動画をご覧ください。

(youtubeより 中ザワヒデキ「芸術特許」3331初パワポ)

先程のは芸術特許についてのyoutubeと言いつつ  
ニコ動を、ニコ動に載ってたものをyoutubeに落としたもの  
で、さらにそれも単にアナログで自分のパソコン画面を撮影していたものを  
落としただけのものとなります。×××(23:46)  
次、方法主義宣言の朗読を今回は僕がやることにします。

(方法主義宣言の朗読)

ということで朗読終わりです。  
次はですね、今からどのくらいの時間になるか、10分を目指して  
ちょっと長く15分ぐらいになるかもしれないんですけど  
今までののはありネタだったんですけど今回が新しいネタになります。  
芸術の方法と方法の芸術のパワポ概説というものを行います。

「芸術の方法と方法の芸術」これは論文でして私が2008年に脱稿したものです。  
約18,500字ありまして、今持ってきてるんですけども  
この岩波講座哲学第7巻の芸術／創造性の哲学というものに所収されています。  
これについて今回は古屋さんの回が方法についての話でしたので  
このへんは今日持ってくるのにいいかなと思ひまして、持ってきた感じです。  
このパワポ概説なんですけど、さっきの初パワポが一回目で  
二回目のパワポは美学校でこの4月にやって、今回三回目になります。  
ここではですね、「芸術の方法と方法の芸術」の骨子を解説します。  
解説すると言ってもこの文章自体が、この論文自体が非常に図式的に書いた文章だったので  
もしかしたら文章で読むよりもパワポで図式的に説明したほうがむいてるかもしれないと  
いうふうに思っています。  
このパワポ概説自体が2011年制作というか、今朝完成したという  
昨日作り初めて今朝完成した、みたいな感じです。  
ということでね、始めます。  
この論文なんですけれども、これに載ってるんですけども  
155ページから170ページ、10見開き位あるんですけども  
その中にさらに構成があります。  
まず序があつて結があつて  
第1節 芸術の方法と自律性  
第2節 芸術の方法と多様性  
で、第3節 方法の芸術と発明  
で、第4節 方法の芸術と要請  
というふうに分けています。  
この中で大事なものは、大事というか分かりやすいのは序と結だけですね。  
序については何を書いたかという  
まず「芸術の方法と方法の芸術」というタイトルの論文なので  
それについて簡単に述べているところです。  
芸術は美ではないという言葉から始まって  
方法とは目的を達成するための手段である、まあ普通にそういう意味だと思いますけど  
目的を達成するための手段を方法というならばどういふことになるか。  
芸術の方法という言い回しにおいては、目的は芸術である、なので  
芸術が主で方法は従であると。  
その場合は特段の謎のある言葉ではないと。

で、(鳩時計)

まあこれは、これは鳩時計が今、たまたまと。

で、こんにちの、こんにち的な意味はない、あまりないというようなことをこの論文の中で述べるつもりだみたいなことを先に先走って書いてます。

方法の芸術という言い回しについては

方法と言った瞬間に目的がどっかにあるということだけど

方法の芸術って言った場合、その方法自体が目的とするものがないということはないのではなくて目的は方法自体であると。

ということがすでに組み込まれているのではないか、この日本語では。

そうすると目的は方法自体であって、方法が主で芸術が従、という形になると。

この言葉自体は日本語としてもどこことなく不穏である。

こんにち的な意味があるのではないかみたいなことを言っています。

で、結論。

結局、芸術は、客観保証されない。

あと、方法は、われわれ自身の真理である。

という身も蓋もない結論ですけど。

なので、もうこれで終えてもいいくらいです。

で、また構成に戻ると、序と結を除いたものがこれになりますね。

まあこっちのほうが一応、論文の本体ということになります。

この論文の本体をどういうふうに図式化しているかと。

まあすでに字面が並んでるだけで、すでに図式的な感じなんですけど

さらに共通の図式を一個立てて、それとの照合を行ってこの4つのセクションを立てています。

その共通の図式とはなんでしょうかと。

芸術の制作における一連の流れというもので

まず規範、discipline、必然的な規範があって、

そこからそれを、そこから演繹されるものとして方法があって、その方法を用いて作品が作られると。

これはあんまり特殊ではないことだと思うんですけども

芸術制作における流れで、こういった流れを図式として出しておきます。

この図式と照合する形でさっきの4つを出していきたいと思っています。

この図式自体はですね、例えば西洋の中世ではすごくスムーズに流れている図式ですね。

規範というのは神様のことである、神権である。

芸術というのは神を讃える技術のことを指している。

なので全然問題がないわけですね。

神を讃えるという規範で、そのための具体的方法で

どんなことをあげてもいいんですけど例えば

キリストや天使の後ろにはキラキラ輝く光輪が付いているとかね、そういうの全部方法ですね。

あるいは西洋の近世でもね、こういった流れがスムーズになるわけですね。規範として王権があって、芸術とは王を讃えるための技術であるというようなことが規範から方法、そこから作品が出来るという一定の流れが一応あるわけです。

しかしこうはいかないケースというのがある。

規範から方法から作品へというので、規範というのは出発点なわけですけどこの出発点がダメな場合と、あとそれから途中がダメな場合とあってこの流れがスムーズにいかないということが起きてくる。

二つに**対立(35:43)**されるわけですね。

さらに、さらにですね、出発点がダメなほうには出発点がどうもあんまり安定しないとなるんだったら出発点を自分で作っちゃえという態度が一個と

あるいは別に出発点なくていんじゃないのと、自作しないという態度も出てくる。

それが1番2番。

で途中がダメといっても、途中には矢印が二つありましてですね

左の矢印のほうは大丈夫なんだけど右の矢印のほうに流れていかない。

規範から方法の流れはいい、けどそこから先が流れていかないというようなものと

あと規範から方法への左の矢印がうまく流れないけど、方法から先への矢印だけは流れているというようなね、二つのパターンが考えられる。

それが3と4であると。

とりあえずこういうふうに分類した上で、出発点がダメというのはどういうことなんでしょうか。

外的な規範の欠如ですね。

規範というものは外から与えられる、例えば神とか王とか

神権、王権みたいな外から絶対的なものとして与えられるとき

それは楽なわけですね、規範といえるものである。それが欠如している、ということになると。

具体的には近代ですね、近代になればそういった規範は欠如して

神様も王様もない世界になるとどういうふうにつづ(37:16)のか。

出発点を自作するというのはどういうことか。

これ芸術の話ですね。

芸術における、作品制作における方法、芸術の方法の話なわけなんですけど。

芸術の方法において芸術の中で規範は芸術自体であると。

そういうものは出発点を自作するほうですね。

芸術の方法と自律性ということになりますね。

しかしその規範を、ようするに芸術のための芸術というようなことが×××(37:56)なっただんですけど

規範も別に必要ないんじゃないか、というような考え方も当然あるかもしれない。

ようするに規範がないならなりでエントロピーの増大にまかせよう。

そうすると何でもありな状態になるわけですね。

芸術の方法と多様性ということになります。

次、途中がダメっていうのはどういうことかっていうと

規範から方法にいくのはいいけどそこから先がダメか、方法から作品にいくのはいいけどその前がダメかみたいところで

突出するのは真ん中の方法ですね。

なので途中がダメな場合は方法が突出する。

方法が突出するのも左のほうが大丈夫なのは、規範から方法が作られて、作品はどうでもいい。

規範から方法を作ることは発明なわけですね。

方法の芸術と発明、という言葉で考える。

次、右の矢印だけというのは、規範はよく分からないけど方法が先にあれば後の作品は作っていくというような場合。

その場合、方法の芸術と要請ということになりますね。

この発明という言葉で、なーんかさっきの芸術特許なんとなく思い出す感じだし

あとこの方法の芸術と要請もさっきの方法主義宣言の要請であるというふうを書いてあったのを皆さん聞き逃してないといいなと思いながら

なんかだんだん仕掛けられた感じになってきましたね。

で、もう各論に入ることができるわけです。

各論に入る前にもう一回見ると、この1番、2番、3番、4番は

さっき見た構成の1番、2番、3番、4番と同じ第1節、第2節、第3節、第4節のタイトルだということになっています。

なので、そこから各論に入ります。

1番、芸術の方法と自律性。

これは規範、これ斜めになってるのはあやふやだよみたいなことですね。

方法から作品っていうのはいんだけどこの規範を自らのうちに求めると。

ようするに芸術の話なのでこれは芸術のための芸術の話であると。

これはきょうぎのぎがく(40.32)におけるモダニズムの話になるわけです。

この中で例を三つ挙げてみます。

一つがスーラの新印象主義。

2番目の例がシェーンベルクの音列主義。

3番目の例がグリーンバーグのフォーマリズム。

他にも沢山例はあるんですけどとりあえずこの三つをこの論文に書いたということです。

上ですね、スーラの新印象主義というのは

この上の図式に当てはめると、規範としては当時最新の科学の知見として

色彩の混合は網膜の中で行われるということなので、じゃあ網膜に直接原色の色を入れてやって

網膜で混色させる絵のほうが正しいんじゃないかと、その知見を規範としました。

ようするに網膜混色を知見。

すると方法としては筆触分割と色彩分割を徹底する、どうやって徹底するか。

方法として徹底する徹底の仕方が点描画法ということになりますね。

点描画法で描いた作品というのが生まれるわけです。

ジョルジュ・スーラ グランド・ジャット島の日曜日の午後。

このときですね、これを描くために点描が編み出されたといっても過言ではないような作品なわけなんですけれども

このとき、このグランド・ジャット島の日曜日の午後というこの作品はまだ方法の芸術ではないと。

点描画法というのは芸術の方法として用いられた。

ようするにグランド・ジャット島の日曜日の午後の風景が描きたくて

その芸術をしたくてその芸術をしたいときに点描画法という方法が採用されたという図式になっておるといことですね。

次、2番、第2節。

第2節にいく前のシェーンベルクとかグリーンバーグについては本を読んで下さい。

第2節、芸術の方法と多様性。

規範がやっぱりあやふやで方法から作品にいく。

規範を自らのうちに求めない態度。

そうするとこれはエントロピーの増大にまかせる態度であって

結局、雑多な何でもありな状態をジャッジする。

結局、何のための芸術でもないんですけどそれらを一言でまとめてとりあえず人生のための芸術というような状態になると。

これは広義の、狭い意味ではなく、広義の意味でのポストモダニズムと関係のある話になってくると。

これも三つ類型を考えています。

類型の1、規範を回避する。

規範というものの自体を想定すること自体がいかなのだというようなことでシュルレアリスムみたいな運動が起きてくるんですね。

あるいは規範が一応あるんだけども神様や王様に比べて全然恣意的とでも言いようのないもの、例えば商業芸術とかイラストレーションですけど

これは単にクライアントの社長の好みとかね、そういうのが規範になったりすると。

そうするとこれは芸術一般の話ではないわけですね。

そういったような場合もある。

で、単なる無規範というようなものもありますね。

ポエトリーリーディングとか色んなものがありますけど、快樂芸術。

結局、2009年までの現状、これを書いたのは2008年までですけど、

2008年に書いてるので、2008年のこの本には現状は今これである

ということを書いてあるんですけど

この前の第四表現主義(仮)というイベントで、2010年からまた変わったんではないかと

いうふうに言ってるので

今の現状はこれではないというふうに僕は思っているんですけど、この文に**即する** (45:05)と現状は今ここであるということになっています。

ここまでがね、第1節と第2節であると。

で、もう一回スーラの絵に登場していただくんですけども

この奥の絵がですね、先程のグランド・ジャット島の日曜日の午後という

芸術のために点描画法が用いられた絵であると。

これ全体がポーズする女たちという作品なんですけれども

点描画法はもともと風景画とか印象派的な風景画などを念頭に発明された方法だったんですけれども

スーラはその後、この点描画法は万能だみたいなことを主張するように、自負するように、少なくとも自負してまして

人体像に点描はあんまり有効でないはずなのに

人体画にも有効なはずだということを実証しようとしてこの絵を描いたのではないかということがよく言われています。

実際のところは知りませんが人物画にも点描画法が有効であることを示そうとしてこの絵を描いたとよく言われている。

もしそれが事実なら何が起きているか。

もしそれが事実なら、この点描画法というのはですね

この絵を描くために用いられた技術ではなくて

この絵を言いたいため、違った、点描画法を言いたいために作品が使われているに過ぎないわけですね。

なので点描画法というのは芸術のための方法ではなくて方法のための方法になってくる。

そうするとこの作品というのは、方法を用いた作品、芸術ではなくて

方法に即して描かれた作品、方法の芸術であるということが起きていると。

なので先程のグランド・ジャット島の日曜日の午後とは意匠が異なるものになっているというようなところから第3節、第4節を見ていきます。

第3節、方法の芸術と発明。

規範から方法、その後の作品ていうのは、もしかしたらちょっと流れが悪くなって途切れているかもしれない。

規範からの演繹によって方法を発明すると。

発明という行為と制作という行為はなんか似てるんですけど

作品を作ることを制作とって、方法を作ることを発明ととりあえず呼び分けることが出来るんじゃないかと思っています。

これも三つ例を挙げます。

一つ目が篠原資明の方法詩。

篠原資明の方法詩というのは二つのパートから成っていて

前段と後段というんですけど、あっ・・・というふうに僕は呼んでるんですけどもそれは、ある型を発案し、でそこでまず切れて  
その型を、型に則って詩を書くというふうな形式なわけなんですね。  
なのである型を発案し、発明ですね、型の発明。  
その型に則って作品を作る、という二段階に分かれているんですけどもそのうちの前半のことですね。  
ある型をまず発案し、というのが例1として  
あと例2としてダ・ヴィンチの芸術活動を挙げています。  
絵の具の発明、画材の発明とかですね。  
あと素描ばかりに邁進してダ・ヴィンチは結果として作品はすごく少なかったと。  
素描は沢山ありますよ、素描は作品ではないとした場合ですね。作品は少なかった。  
篠原資明の場合は沢山作品があるんですけどダ・ヴィンチは作品が少ないと。  
で、例3、中ザワの芸術特許。  
先程のもんですけど。  
これは、方法自体が芸術だと思ってるので、これを用いた作例はあるんですけど作品は作ってないものです。  
というふうに図式が出来ます。  
第4節、規範はあるのかどうかはともかくとして方法がまず先にあって  
そこから作品を作る、その回路のほうが、方法が突出している、方法のための方法が突出している。  
規範から方法が出てるみたいなことはさておき、もう方法を要請とみなして作品を制作するという流れですね。  
これも三つ例を挙げていて  
例1はさっきの篠原資明の方法詩の後段。  
あと例2としてデュシャンのレディ・メイド。  
これは、例えば反芸術というのが規範にあって、  
その反芸術のためにレディ・メイドという方法が採られて、実際に便器が作られたみたいなふうには言えね、規範から方法から作品という流れに見えるんですけども  
どうやら実際のところはレディ・メイドのほうを先に思いついて  
レディ・メイドを解説するために反芸術の概念を後から定義したみたいなんですね。  
なので、ここから演繹されて出てきたものではないと。  
しかもですね、レディ・メイドはこの方法を使えばいくらでも作品が作れるということで、なので、じゃあいくらでも作品作ろうというふうにはならず  
それだと方法の価値が減ってしまう。  
むしろ方法をきちんと言うためには作品の数を少なくするというのをわざわざ意図的にやっているんですね。  
作品を少なくする、して出来た、例えば便器の作品、噴水あるいは泉という名前がよく知られています。



例えばその、泉、噴水という作品は泉が言いたくてレディ・メイドという方法が採られたわけではないんですね。  
レディ・メイドの方法を出したいと、そのときに、じゃあ泉という作品でレディ・メイドをだしていこうというふうにそこで反転しているわけですね。  
方法のための方法が突出している。  
で、例3として中ザワの方法主義。  
これは先程も読んだんですけども  
一番最初に宣言として、要請という言葉を使った宣言を出しているわけです。  
この方法で作品を制作する、その場合の規範との関係については実はよく読んでいただくと不明な部分分かるんですけど  
それについても詳しくはこの本を読んで下さい。  
ということで各論は終わりと。  
最初に戻ると、構成、  
序と結があって、1、2、3、4があると。  
もう一回、序と結を読んで  
結論のところを読んで  
芸術は、客観保証されない。  
方法は、われわれ自身の真理であるというのがやっぱり飛躍に思えるということで終わります。  
どうもありがとうございました。

終わり

(拍手)

